

プレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」  
「祈り」プロジェクト 第三回ワークショップ報告書

開催日時：2014年2月27日（木）、28日（金）

会 場：筑波大学筑波キャンパス 1D201

参加人数：45名(教員30名，大学院生等15名)

## プロジェクト概要

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、津波と原子力発電所の事故を生じさせ、未曾有の被害をもたらした。その被災地域の一部となった本学には、この災害の意味を問いなおすこと、さらには今後に向けての発信の責務がある本研究プロジェクトにおいては、拠点形成を目指す上で、この課題に対して人文学の領域からいかなるメッセージを発信することができるかが問われていると考えた。この問題は、大きな災厄のなかにおける人の営みについて大いに考えさせるものであり、総合大学としての本学が学問領域を越えて取り組むべきテーマでもある。

そうした問題意識のもと、本プロジェクトにおいては、プレ戦略イニシアティブ初年度の平成24年度に、人の営みとして人文学の領域から捉えるべき「祈り」というテーマを中核事業のひとつとして設定し、平成25年度から構成員全員で取り組むこととした。本研究プロジェクトの構成員の多くは、ことばを介した人の営みをなにかがしか研究テーマとしていることから、「祈り」ということばとそれにまつわる諸相を探求することは、共有すべき課題と考えたのである。本年度は、こうした共通課題に取り組むことで、将来の拠点化をめざす事業を始めた。事業の方針としては、「祈り」の諸相について探求すべく、前近代から現代に至る時間軸と、日本から世界に繋がる空間軸（いわば縦軸と横軸）の双方を包括的に意識しつつ推進することとした。具体的な事業として、3回のワークショップと海外における成果発表の場を用意した。これらを通じて、日本における「祈り」の独自性を照射すると共に、東アジア・中央アジア・メソポタミア・欧州といった諸文明・諸地域のそれとの間で比較・相対化をも行っている。



## 第一セッション「抽象名詞主題文に関わる日中対照」

第一セッションでは、日本語の抽象名詞主題文研究を牽引する安部朋世氏（千葉大学）が日本語の抽象名詞主題文についての紹介を行った。続いて、日中翻訳論の第一人者である林璋氏（福建師範大学）が中国語の抽象名詞主題文について紹介した。これをもとに、形式名詞と文型との関連について研究を進める宮城信氏（富山大学）を指定討論者として、課題の探求を図った。



## 趣旨説明

矢澤真人（筑波大学人文社会系・日本語学）

「私の願いは、世界が平和であることだ」のように、抽象名詞を主題とし、内容を述部で表す文を「抽象名詞主題文」と呼ぶ。日本語では、下記の通り、いくつかのパターンがある。

- (1) 【持ち主】ノ【抽象名詞】ハ【内容名詞句】ダ  
私の願いは、世界の平和だ。
- (2) 【持ち主】ノ【抽象名詞】ハ【内容句】（トイウ）コトダ；  
私の願いは、世界が平和であることだ。  
私の夢は、作家になることだ。
- (3) 【持ち主】ニハ【内容句】（トイウ）【抽象名詞】ガアル  
私には、将来作家になる（という）夢がある。←存在文で示す
- (4) 【持ち主】ハ【内容句】ト／【内容句】コトヲ【抽象名詞を派生する動詞】  
私は、世界が平和になる ようにと／ことを 願っている。←引用節と述部で表す

これらの文型は、抽象名詞の種類によって、下記の通り、許容度の違いがあるが、それ

が何により制約されているのかについては、十分に解明されていない。

- (5)a 世界が平和であるようにと祈っている。
  - b ?私の祈りは、世界が平和になることだ。
- (6)a ?この金属の性質は、熱で元に戻ることだ。
  - b この金属には熱で元に戻る性質がある。
- (7)a (?)現在の戦況は、我軍が敵陣近く攻め込んでいます。
  - b ?現在の戦況は、我軍が敵陣近く攻め込んでいることです。

抽象名詞主題文に関わる研究の意義について、言語学、国語教育、日本語教育の観点からの有用性が考えられる。

◆ 言語学の観点からの有用性

抽象名詞主題文は、上に挙げたように主題となる抽象名詞による文型制約が認められる。従来の述語中心の考察は、文構造を明らかにしたが、このような主題名詞句による文型制約については十分な説明をなしえなかった。主題部を先に示し、それに適応する説明部をつなげることは、日常の作文において普通の行為である。抽象名詞主題による文型制約を考察することは、言語の線状性に沿った言語活動の検討へと結びつき、述語中心の構文研究を補完するものと考えられる。

また、抽象名詞主題文の取る文型の比較検討は、叙述内容と文型との関係を整理し、関連性を見いだすものであり、述語動詞単位の文型論からより広い観点からの文型論を展開させる可能性を持つ。さらに、文末の形式名詞と文型との関連も対照とすることから、述部に形式名詞を取る文型の研究にも波及する。

◆ 国語教育の観点からの有用性 ; composition との連携

平成 21 年度全国学力学習状況調査中学校国語において、抽象名詞主題文に関わる問題が出題された。

- (8)a この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います。
  - b この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合うことです。

(8)a のような文(「モナリザ文」と称する)を(8)b のように修正するという問題であったが、正答率は 50.8%であった。先に述べたように、主題部を先に示し、それに適応する説明部をつなげることは、日常の作文において普通の行為であるが、この際にしばしば主題部と説明部との不整合を引き起こす。安部朋世(2012)は、BCCWJ を用いて、「特徴は」を主題とする抽象名詞主題文を調査し、このような誤りが一般の文章でも 6~7%出現していることを示した(2012 年度全国大学国語教育学会富山大会ラウンドテーブル)。

モナリザ文は、話し言葉では聞き過ぎられることも多いが、書き言葉では文法的な制約が厳密に働き、こうした主述の対応も見過ぎされない傾向にある。作文教育の観点からも、抽象名詞主題文の研究は意義がある。

#### ◆ 日本語教育の観点からの有用性

中国語では、抽象名詞主題文は、「我的梦想是当为作家」のように、明確な名詞マーカを伴わずに表す。この違いは、言語学的には日中のコピュラ文の制約の違いを示すものとして注目される一方で、中国の日本語母語話者が困惑する構文の一つとなっている。

東京外国語大学望月圭子研究室の日本語誤用辞典(公開版 Ver. 1. 1)でも、

(9) 私の失敗したことは興味がない学科を[選]びました。(選んだことだ)

(10) ほかの経験は先生から宿題をいただきました。(いただいたことだ)

(11) 私の失敗の経験は英語のスピーチは人前にできない。(できないことだ)

といった中国人話者の誤用が報告されている。

日本語の典型的なコピュラ文は、主題部と説明部がともに名詞句の「名詞句+名詞句ダ」型であり、抽象名詞主題文もこれに従って、「内容名詞句+ダ」もしくは「内容句+コトダ」の形を取るものであり、モノリザ文はこれが崩れた形であると見なせる。一方、中国語においては、「是」の後に明示的な名詞マーカが現れるとは限らない抽象名詞主題文の日中対照は、日本語と中国語のコピュラ文の制約に関する研究と結びついていく。さらに、日中の抽象名詞の類型比較や「私には作家になる夢がある」のような修飾節の比較など、様々な課題へと展開することが予想される。

## 日本語の抽象名詞主題文

安部朋世 (千葉大学教育学部・日本語学)

「平成 21 年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語 A 問題」の例などを通して、「この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います」のような「主述の関係が適切でない文」(以下、「モノリザ文」と呼ぶ)が見られる。このような文は、実際の教育現場において、学習者・指導者の直観に大きく依存した形で扱われているように思われる。発表の中では、モノリザ文は何を表す文なのか、モノリザ文の種類にはどのようなものがあるのか、モノリザ文を解消するためにどのような文型を選択すればよいのかという問題を考察した。その上で、抽象名詞主題文についていくつかの現象を指摘し、モノリザ文と抽象名詞主題文の研究とがどのように関係するのかを考察した。その概要は下記の通りである。

#### ◆ モノリザ文は何を表す文なのか

モノリザ文は、〈「抽象名詞を主題とし、その抽象名詞の内容を述部で表す文」(「抽象名詞主題文」と呼ぶ)において、主述の関係が適切でない文)である。そのため、モノリザ文を考察することは、抽象名詞述語文における「抽象名詞」や「抽象名詞の内容」の内実を明らかにすることに繋がる。

◆ モナリザ文の種類にはどのようなものがあるのか

モナリザ文の種類として、抽象名詞主題文「抽象名詞 A は[内容]名詞 B だ」において、下記の 3 点を示した。

- ・抽象名詞の内容を述部で述べる際に、内容を表す部分のみで終わらせてしまう場合
- ・抽象名詞の内容を述部で述べる際に、抽象名詞 A と合う名詞 B が存在するが、それとは異なる名詞 B を用いている場合
- ・抽象名詞の内容を述部で述べる際に、抽象名詞 A と合う名詞 B を見つけにくい場合

以上を踏まえて、抽象名詞によってどのタイプのモナリザ文が現れるかを考察することは、抽象名詞主題文の抽象名詞の特徴や、述部に現れる形式名詞の特徴についての考察に繋がるものと考えられる。

◆ モナリザ文を解消するためにどのような文型を選択すればよいのか

「この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います」という文は、「この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合うことです」という正答例以外にも、「この絵は、どの角度から見ても女性と目が合うのが特徴です」、「どの角度から見ても女性と目が合うのは、この絵の特徴です」も同じ内容を表す文の候補となり得る。そのため、モナリザ文問題は、単に「主述を適切に修正する」という捉え方ではなく、様々な文型からどの文型を選択するかといった角度からの分析・研究が必要である。

## 中国語の抽象名詞主題文

林璋（中国福建師範大学・日本語学・日中翻訳学）

中国語の抽象名詞主題文を巡り、中国語の「抽象名詞」、「主題」、抽象名詞主題文の形を取る「概念説明文」を紹介した。その概要は、以下の通りである。

◆ 中国語の抽象名詞

品詞的には、純粹名詞と動名詞がある。動名詞と動詞は形態上区別がない。構文的位置によって区別される。以下の例では、(a, b)は動詞、(c)は名詞（動名詞）である。

- 事后她非常后悔而悲痛，请求天神宙斯给予帮助。
- 欧盟请求世贸组织批准其制裁美国
- ～，同时驳回了原告要求被告支付精神损害赔偿费的请求。

続いて、古川裕（1989）の分類や、袁毓林（1992）の分析を紹介した。古川（1989）では、自者指示によって修飾されるものは必ずしも抽象名詞ではない。具体名詞もその位置に生起すること、“VP 的 s+n” の位置に生起する名詞 n には[CONTENT（内容・包含）] という意味特徴があることが指摘されている。袁毓林（1992）の研究では、観念・感情を表す名詞は二項名詞であること、“VP 的 s+n” の n であることが分析されているが、主題と

の関係については言及されていない。

#### ◆ 中国語の主題

中国語の主題は、顕在的な主題マーカーを持たない。また、主語とは、動詞/形容詞の前に生起する名詞のことである。中国語の主題の種類について、徐烈炯、刘丹青(1998)による項照応型、状況型、コピー型、節型の分類や、時間・空間に関する背景情報、全体-部分、または所属関係、主題は述部のどれか名詞的成分に含まれる意味成分、主題は述部の対格節に含まれる意味成分という李秉震（2012）の分類を紹介した。さらに、もう一種の主題として、下記の例において、停靠<电车 格林丽景>のように、“停靠”は二項動詞であり、“下一站”は“格林丽景”と同格関係にあることを指摘した。

d. 合肥轻轨“上路”：下一站停靠格林丽景(次の日本語文と同じ構文)

e. 次の停車駅は石神井公園にとまります

#### ◆ 概念説明文

概念説明文の構文について、「我的梦想是中国人能够了解篮球」のように、抽象名詞+是+名詞化した行為となる抽象名詞主題文、「我的梦想：中国人能够了解篮球」のように、抽象名詞+コロン+動詞節というモナリザ文的なもの、「\*我的梦想中国人能够了解篮球」など、名詞述語文の解釈にはならず、抽象名詞が動作主の位置にありながら、動作主の役割が果たせないモナリザ文を紹介した。

## ディスカッション

指定討論者：宮城信（富山大学人間発達科学部・日本語学）

指定討論者から、安部氏の発表について、1) 抽象名詞主題文をどのように分類していくのか、2) ～ことだ、からだ、内容だなどを取りにくい文について、名詞と構文の関係をどのように分析していくのかなどの今後の課題を議論した。また、林氏の発表については、主語と主題についての中国語における発想について討論した。



## 第二セッション「祈りと言葉」

第二セッションでは、「祈り」と言葉の関わりについて、日韓中3カ国語の対照を行い、「祈り」の精神性・日常性・言語性などの観点から検討を進めた。日本語と「祈り」の関わりについては、矢澤真人氏（筑波大学）、中国語と「祈り」の関わりについては、彭玉全氏（中国・西南大学）、韓国語と「祈り」の関わりについては、康永富氏（韓国・慶熙大学校）がそれぞれ基調となる報告を行った。



## 趣旨説明および「日本語と祈り」

矢澤真人（筑波大学人文社会系・日本語学）

日本語の「祈る」という動詞は、「い（斎；神聖な）」＋「のる（宣る；重大なことを言葉に出す）」という語構成によりなると言われ、発話性を伴った動詞であった。「被害者のご冥福を祈って、黙祷」のような表現は近代になって用いられたものであり、近代以降、「世界が平和であるように祈っている／願っている」のように、思考動詞と同様の用法も持つに至っている。

一方、「願う」は、「ねぐ（労ぐ・請ぐ；他の心を慰めいたわる）」に反復・継続を表す「ふ」が付いたものされ、「ねぎらう」と同語源とされる。「願う」は、上代より、発話性を伴わない心内の希望を表す用法も発達させていた。

現代の用法において、「祈る」と「願う」の用法を比較すると、次の2点が指摘できる。

### 1) 引用節中のモダリティの違い；「他への詠え」と「自らの希望」

「～と祈る」と「～と願う」を比較すると、「祈る」の引用節の8割は「～し給え」のような命令形や「～するように」のように、他に詠える表現が占める。「願う」の引用節の8割は「～したい」や「～「してほしい」のような自らの希望の表現が占めており、引用節中のモダリティに明らかな違いが見られる。

### 2) 抽象名詞主題文としての用法

「世界が平和であることを祈っている／願っている」のように同様の引用節を取るが、

抽象名詞主題文にすると、「私の願いは世界が平和であることだ」のように、「願い」は抽象名詞主題文を作れるが、「？私の祈りは世界が平和であることが」のように、「祈り」は抽象名詞主題文を作りにくいという違いが見られる。一般的に、発話動詞「叫び」「発言」などは、抽象名詞主題文を作りやすく、「祈り」が抽象名詞主題文を作りにくいことは、現代においても「祈る」が発話動詞の性格を保つように見えるが、さらに検討が必要である。

その他、現代日本語の別れの挨拶など、相手の安穩を言祝ぐ言葉では、神仏を介在させないという特徴が見られる。「お気をつけて」のような直接要求表現はもちろんのこと、「ご健康をお祈りしています」も、「あなたの健康を神（仏）にお祈りしています」のように神仏を介在させると、迂遠な表現になるといったことも観察される。

## 中国語と「祈り」

彭玉全（中国西南大学・日本語学・日本語教育学）

中国語における「祈り」について、中国語の「祈り」の時代性、形式的な特徴、修辞法といった側面から検討した。本発表では、「祈り」を、人々が日常の付き合いにおいて、数多くの形の言葉で、祝福と希望の意を表し、喜ばしい雰囲気を添える民俗言語現象と規定した。発表の概要は次のようなものである。

### ◆ 「祈り」の時代性

「祈り」を表す手段として、手紙や葉書、年賀状の利用が減少しつつある。現在の中国では、年賀状はほとんど送られていない。一方、ネットワークと携帯電話の普及によって、携帯電話のショート・メッセージによる「祈り」は、一般的になっている。こうした変化は、中国の経済と社会の発展、人々の生活スタイルの変化と関わっていると思われる。発表では、新中国以前、新中国成立から文化大革命以前、文化大革命期間、改革開放以来、といった四つの時代に分け、それぞれの時代における「祈り」の内容について概観した。

### ◆ 「祈り」の言語形式的な特徴

中国語の「祈り」を表す言語的形式の特徴を見ると、「祈り」のマークもあれば、マークがないものもある。「祈り」のマークは、主に“祝”、“祝福”、“祝愿”、“愿”、“让”といったものがある。発表では、ネットワークから収集した春節の「祈り」と筆者が春節に受けた携帯電話のショート・メッセージに基づいて中国語の「祈り」の言語形式的な特徴を考察した。

### ◆ 「祈り」の修辞法

現代の中国では、「祈り」を表すために様々な修辞法が用いられている。今回の発表では、比喻、擬人法、言い表そうとする事物を、それと関係の深いもので表現する換喩、引用、誇張、さまざまなことばをつみかさねてそれを表現する列叙法や漸層法、対句などの修辞



法を紹介した。

中国語の「祈り」は、一つの言語断片、あるいはディスコースと見られてもいい。「祈り」についての考察は、まだ多くの課題が残っている。例えば、発表では、「祈り」の前半部分と後半部分をそれぞれみたが、「祈り」ディスコースの前半部分と後半部分がどのように繋がっているか、つまり、「祈り」がどのように生成するかについて、「祈り」ディスコースの構造について、認知言語学のイメージスキーマ理論で分析できるだろう。これは、今後の課題に残したい。

## 韓国語と「祈り」

康永富（韓国慶熙大学校・日本語学・日本語教育学）

日本語と韓国語の対照を交えながら、韓国語と「祈り」の関わりについて紹介した。その詳細は、下記の通りである。

### ◆ 『分類語彙表 増補改訂版』からみた「祈り」の関連語

「祈り、祈る」は、「人間活動－精神及び行為」のカテゴリーの中に分類されており、「心(信仰・宗教または欲望・期待・失望)」と「生活(行事・式典・宗教的行事)」の項目の中に入っている。そのほとんどが「心」の項目の中にある。ここでは「祈り」に関連する言葉をすべて扱うことはできないので、代表的と思われるものをいくつか選んで、それを中心に韓国語との関係を明らかにした。

### ◆ 『의미로 분류한 현대 한국어 학습사전(意味で分類した現代韓国語学習辞典)』(2000)(한국문화사)からみた「祈り」の関連語

「祈り、祈る」に当たる韓国語の「빌다, 기도하다」は「宗教と信仰」の項目の中に分類されており、この項目の中には、祈りの動作としての儀式をあらわすものがほとんどである。また、「빌다」の場合、「바라다」と同じ項目としての「思考と感情」の項目にも入っている。

### ◆ 日本語と韓国語の「祈り」に関連する言葉

次のような「祈り」を巡る韓国語と日本語の言葉を中心として、検討した。

- ・ 「바라다」「구하다」と「願う」

① 祈りの対象が明示されない場合 願う, 바라다→祈る

② 祈りの対象が明示される場合 願う, 구하다→祈る

ただし、2で「바라다」が使われる場合、その対象に「望む」という意味としてとらえられやすい。

- ・ 「빌다」と「祈る」, 「기도하다」「祈禱する」

「빌다」

- ①非宗教的な場面でも使う。願いを言う(心のうちで, 口で)→祈る
  - ②(人間に)許しを請う, 助けを求める→謝る, 懇願する, 哀願する
- 名詞形は, 動名詞(빌)としてしか使わないので, 「기도」を使う。

「祈る」

非宗教的な場面でも使う。願いを言う→祈る

- ・ 「念仏を唱える」「お題目を唱える」と「염불을 외다」

「念仏を唱える」→仏(浄土宗?)

「お題目を唱える」→釈尊(日蓮宗)

「염불을 외다」→仏

- ・ 「참배하다」と「お参りする」「参拝する」

「참배하다」→非宗教的な場面でも使える。

「お参りする」→神社, お寺

「参拝する」→神社, お寺

## ディスカッション

報告と議論を通して, 祈りを表す言葉の歴史的な変遷から現在の用法まで, 分析対象は極めて広範にわたることが示された。そのため, 「祈りと言葉」の考察に当たり, 何を, どのように捉えるかという分析の方法が課題になることが確認された。また, 中国語のメールでの「祈り」の表現などについても, 情報交換が行われた。

## 第三セッション「祈りと文化」

第三セッションでは、最初に「祈り」とモノとの関わりについての基調講演を乾善彦氏（関西大学）が行った。また、文化財に見られる「祈り」の構造について吉澤悟氏（奈良国立博物館）、ヨーロッパと中国との文化接触による「祈り」の相互解釈について井川義次氏（筑波大学）がそれぞれ基調となる報告を行った。



## 趣旨説明

谷口孝介（筑波大学人文社会系・日本古代文学）

古代の祭祀は自然物を対象としていたが、やがて仏像という「かたち」を伴うものになった。目に見えない魂魄が、目に見える「かたち」として顕現し、モノとして力を発揮する。そのことは例えば願文を埋める行為とも結びついていよう。

本セッションでは、目に見えないものあるいは「祈り」が、文字としてモノに刻まれることの意義、また、そのことが祈りの行為とどのように結びつくかを見ていきたい。また、そのようにして築き上げられた「祈り」の文化が、他の文化と接触したときに何が生じるかを併せて考えたい。

## 基調講演：「祈り」が書かれるとき

乾善彦（関西大学文学部・日本語学）

本講演は、最初に「祈り」に関する語彙を確認し、発話行為と「祈りの所作」に関する資料を見た。次に「祈り」を書く行為とは何か、書かれた「祈り」にはどういう意味があるかを論じた。最後に「思い」を書くことについて様々な呪術との関連性を概観した。概要は次の通りである。

### ◆ 「祈り」に関する語彙

「祈り」の言葉は、大きく二つに分かれる。第一に「祈り」を発する言葉、すなわち発話行為に関するものとして、「いのる、のろふ」がある。これらは共に「の（宣）る」であり、呪力をもった発話を示す。また、「い（斎）」は「いむ、いはふ、いつく（しむ）」などにも見られる。さらに「ことほく（言禱）、ほさく（祝・呪）」の「ほく」は言葉の持つ霊力が吉凶を左右するという考えを反映している。第二に、祈りの所作を表す言葉については、神の心を休める「ねぐ（労・請）」、求める「こふ（乞・請・祈）」、頭を下げて願い頼む「のむ（叩頭）」、受け取る「うく（請・受）」などがある。

このように見ていくと、「祈り」とは発話を伴う行為であり、文字のない時代から行われ続けてきたことが想像される。しかし文字が使われるようになると、文字に対する霊力という新しい考え方が生まれたようである。

### ◆ 「祈り」の書記行為

文字の伝来とともに「祈り」の書記行為が始まった。日本最古の線刻である2世紀中頃の弥生期墨書土器、また5～6世紀頃の金石文、7世紀の造仏銘、上野三碑など、「願い」を金属や石に「刻む」行為が見られるようになる。また、「別れ」を願う「君我念」の合字のように、呪符木簡を作る行為は「祈り」も「呪い」も含む多様な形で行われた。

### ◆ 「思い」を書くこと

11～13世紀の「いろは」歌は手習・習書の意義を持っている。しかし、土器にびっしり書かれ読み解き難い文字群は、何らかの思いが込められていると考えざるをえない。手習歌を書くこと自体に呪術性があった可能性もあるが、もしそうであれば、土器が割れているのも偶然ではない可能性もある。

結論として、もともと「祈り」は唱えられるものであったが、文字の伝来とともに書く「祈り」が現れた。それは文字の永続性に着目してのことであると考えられる。金石や石に「刻む」行為としての「祈り」は、目に見えないモノへの伝達を意味する。ここに、これらが紙ではなく木簡や土器に書かれたことの意義があると思われる。

## 考古学よりみた奈良時代の仏への祈り

### 一 正倉院宝物・鎮壇具・墳墓一

吉澤悟（奈良国立博物館学芸部・日本考古学）

本発表では、東大寺正倉院に奉納された宝物、および願文の形をとった目録から、仏に対する「祈り」の構造について論じた。概要は次の通りである。

#### ◆ 仏教的な「祈り」の構造

仏教的な「祈り」は、まず「作善、功德」を積み、仏に対して良い行いをするところから始まる。喜捨・施入、写経や読経、造寺・造仏、起塔、社会奉仕によって、果報・冥利・救済といった仏世界からの報いを得る。そのことが天下太平・子孫繁栄・極楽往生・富貴延命など本来の願望の達成につながる。個々の状況に応じ、この流れを要約したものが「願文」である。

#### ◆ 正倉院宝物にみる「祈り」

東大寺正倉院の正倉は聖武天皇や東大寺に関わる宝物を納めたもので、約九千件の遺宝を蔵する。光明皇后が聖武天皇の遺愛品を奉納し、『国家珍宝帳』『種々葉帳』という献納品目録も残されている。目録は願文として記され、聖武天皇の事績と種々の奉納品により、天下太平と健康長命を願うものとなっている。「祈り」の内容は日本語であるが、その形は漢詩として書かれる。

このように、日本の仏教信仰の根底には作善を願いに振り向ける構造がある。例えば、中世に盛んになる石塔の造立などは、このことを最大限に敷衍したものである。それに対し、神道的な祈りは潔斎・謹み・奉仕・祝詞の形をとり、「作善、功德」の原理ほど結果への道筋が明確ではない。言わば「決まったことを引き継いでいく」こと、自分の代でも恙なく行為を続けていくことに主眼がある。

## 生命の連鎖と祈りの視点

### 一 来華キリスト者の見た中国の祖霊観一

井川義次氏（筑波大学人文社会系・中国近世哲学）

本発表では、「四書」の初めてのラテン語全訳を完成させ、これを通じてヨーロッパ啓蒙運動や、シノロジーに甚大な影響を与えたイエズス会宣教師、フランソワ・ノエル（1651～1729）による中国哲学に関する専著『中国哲学三論』からうかがえる、ヨーロッパ人の中国の霊魂と祭祀観について考察した。

#### ◆ ノエルと『中国哲学三論』

ノエルは1651年8月に、ベルギーのヘストルッドに生まれ、19歳でトゥルネのイエズス会の修道院に入り、青年時代、自然科学や人文諸科学にも関心を懐き、多くのラテン語による詩文、戯曲論を著した。7年間、ベルギーで文学・修辞学を教授。その後東アジア宣教を志し、1685年、マカオ到着後、江南、淮安、江西、南昌、建昌、南豊などの地に宣教地域を広げる。1702年、ヨーロッパに赴き、典礼論争に関して、ソルボンヌ大学神学部から指弾されていたイエズス会の弁護活動を行う。1709年以降、儒教古典（『孟子』を含む「四書」全文および『孝経』『小学』）の訳書『中華帝国の六古典』（1711）や『中国哲学三論』（同年）などの著作を出版。1729年にこの世を去っている。

『中国哲学三論』は多くの中国の論著や経書を引用し、また朱子、黄翰、蔡清、張居正等著名な知識人の実名とその説を提示している。また『文献通考』、『大明会典』、『朱子家礼』、『性理大全』、『四書蒙引』等々を引証とし、中国古典の霊魂論のみならず、ノエル在華時期の明～清代の霊魂観にも広く目配りしていた。

#### ◆ ノエルによる中国の霊魂観に対する解釈

『中国哲学三論』を中心として、ノエルによる中国の霊魂観に対する理解を検討した。ノエルは、宋明理学の鬼神観に対し、受容できないものはこれを退けつつ、その合理的解釈には可能な限り歩み寄った解説を行った。その紹介は、中国哲学の立場からするならば、キリスト教的な枠組みからの、恣意的裁断であるともいえる。ただその翻訳は、個人的生命の永遠性を越えた、中国哲学における生命の空間的連続性・時間的永続性の可能性を、祖先祭祀のケースを通して間接的に啓蒙主義の時代のヨーロッパに示したことにもなったのであった。

## 第四セッション「総括」

司会進行：小松建男（筑波大学人文社会系・中国近世文学）

矢澤真人（筑波大学人文社会系・日本語学）

谷口孝介（筑波大学人文社会系・日本古代文学）



小松建男氏が司会となり、矢澤真人氏が第一・第二セッションのまとめを、谷口孝介氏が第三セッションのまとめをそれぞれ行った。その上で、ワークショップ全体に関するディスカッションが行われた。

まず、「言葉と行為」という観点から議論が行われた。こういった場面で「祈り」という語を使えるかというのは、「祈り」の意味範疇や文法的関係のみならず、文脈あるいは談話構造の問題もあることが確認された。ならば、ある文脈においてどのような「祈りの行為」が適切であるかが考えるべき課題となる。また、我々の文化における「祈り」あるいは「祈る行為」が、別の文化においてどのような視点で見られているのかを考察する必要もある。大まかに言えば、ヨーロッパでは鬼神と人との間には断絶があり、切れている。一方、東アジアでは鬼神と人とは連続的につながっている。こうした違いを掘り下げていく必要があるだろう。

また、「モノと行為」という観点からも議論が行われた。「よろしくお願いします」のような「願い」が相手の力を期待するものであるのに対し、「祈り」は相手に対して直接言うことのできないものである。したがって、「祈り」はその内容について自分や相手の力を期待するのではなく、「祈り」という行為自体を何らかの形で意識することではないだろうか。

そして「祈り」の動作が形として固定化されれば、宗教における儀式的な「祈り」になると考えられる。そうした「祈りの形」は「モノ」と結びつきやすいものであろう。例えば、「願文」は残さねばならない「願い」と一回限りの「願い」とを区別する必要はあるものの、その内容が重要とされる。それに対し、一種の祈禱行為である埋教は、その内容としてはその場限りの即時的な写経が多いため、内容よりも残すという形式的行為に意義があったと考えられる。なお、中国において「祈」と「願」が一緒に用いられることはないという指摘もあった。

関連して、古代日本では「カミを祈る」という言い方が普通であったが、現代の「祈り」は相手を想定しないという指摘もあった。例えば、我々が「御多幸をお祈り申し上げます」と言うとき、宗教的な文脈を除き、「祈りの対象」を想定しないことがほとんどである。これは「自分は祈っている」という意識の表明にすぎない。では、いつからそのようになったのか、なぜそのようになったのかについては、今後の課題として残された。ある時代・ある地域における「祈り」と「願い」を考察していくことは研究における方法論であるが、そこから洗い出された事項を一般的な問題として広げていく必要があるだろう。

近代において超越性を放棄し、「祈り」から「願い」へと転換してきた日本は、東日本大震災を経て、再び「祈り」へと戻らねばならないのではないか。では、我々が向かうべき「祈り」とは何であるのか。現段階で収束する議論ではないが、今後も言語、歴史、文化など様々な分野との議論を続け、その知見を総合させていくことの重要性が確認された。